

九州の屋根「くじゅう連山」

古川 真人

6月初めにミヤマキリシマで有名な「くじゅう連山」の山々に登りました。くじゅう連山とは、平治岳・北大船山・大船山など東側の大船山系と三俣山・硫黄山・久住山・中岳など西側の久住山系の総称で、知名度が高いのは日本百名山の久住山(1786m)ですが、九州本土最高峰は中岳(1791m)です。

成田7:35発、大分9:30着。移動手段はレンタカー。今日はいくじゅう連山の途中に座する由布岳に登り、その後由布院町に宿泊予定です。由布岳もミヤマキリシマ自生とのことなので楽しみにしていました。

別府を過ぎ30分ほどで由布岳の標識が目に入り「ここだな・・・」と車を止め、アキ



由布岳から望む由布院町

レス腱・足首・屈伸など準備運動をするに従い高揚感が増し、山頂を目指し一步一步登り始めました。登山道は手入れが行届き登りやすい道でした。後日知りましたがスーパーボランティアおじさんこと同県日の出町在住の「尾島春夫」さんが、登山道の整備・清掃を行っているとのことでした。ボランティア活動は社会への恩返しで現在も健在とのことでした。

2時間弱で山頂(1583m)。遠くには別府

湾、右を向けばくじゅうの山々、眼下には

今日宿泊予定の由布院町が望め、登山家人気の山に納得しました。がこれからは難所が多い火口直径約400mのお鉢巡り。ネットで調べ知識はありましたが踏み場のない岩場、滑り台のような急斜面、左右絶壁での飛び石、と登山道とは大違い。予想以上の難所の連続で予定をオーバーした1時間半のお鉢巡りでした。山頂で会った団体の一人が危険なところが数か所あるので気をつけて、と言っていたのを思い出し「なるほどなあ〜」と改めて火口を眺めていました。すると何とレオタード姿の女性が・・・、山にレオタードで・・・?。話を聞くと別府でエアロビクスのインストラクターをしているとのこと。それにしてもレオタードはないだろう・・・。話しながら下山しようと思ったら速いのなんの、何分もしないうちに見えなくなりました。変なおじさんと思い警戒されたのかも・・・。

なおミヤマキリシマは急斜面に群生しており近くで観ることが出来ず残念でしたが、お鉢巡りは緊張感がありスリルに満ちた由布岳でした。また山でレオタードは初めてでしたがスタイルの良さに見とれ写真を撮るのを忘れてしまいました。失敗!!。由布院町の温泉宿。疲れた体を癒しサッパリしたところで居酒屋へ、と思いましたが中華の看板が目に入り今日はここにするかと中へ。今はやりの「町中華でやろうぜ」じゃないけどひとまず乾杯!!。湯布院は昭和30年に由布院町と湯平町が合併して誕生した地名で、厳密にいうと湯平町を含む場合は湯布院、含まない場合は由布院となるそうです。



位置・行動図

4時起床、朝食を済ませ登山口の長者原へ向かいました。車を走らせること1時間、5時半と言うのに駐車場は7割の混雑。準備運動後目的地の平治岳を目指しました。



タデ原湿原、正面は三俣山

途中ラムサール条約登録湿地の「タデ原湿地」を通り、森を過ぎ、ミヤマキリシマが点在する丘を超えること約2時間で「坊がつる」が見えてきました。ここは東に平治岳・北大船山、西に三俣山に囲まれた盆地(1200m)で、水・トイレが整備されている無料のキャンプ場です。遠くから見るとカラフルなテントが点在し穂高の「涸沢カール」を思い出しました。この場所もラムサール条約に登録されていますが、芹洋子さんが歌った「坊がつる賛歌」が知られています。

ここから平治岳は1時間半。期待に胸を膨らませ想像しているうちに速足になり息切れが、腰を下ろし落ち着いたところで再出発。約1時間登って森を抜け開けたところが大戸越。ここで思わず“ウワー”と声が…。これが噂のミヤマキリシマ!!。ミヤマキリシマに覆われた山!!。ここぞとばかりシャッターバチバチ。ここがこの状況なら頂上は…。期待は膨らむばかり。ここからは急登、はやる気持ちを抑えしばし休憩。体力回復したところで花の中へ飛び込み上へ上へと…。道を間違え藪漕ぎもなんのその、ひたすら頂上を目指す無謀な行動でした。

30分ほどで平治岳山頂(1643m)。見渡す限りミヤマキリシマ。ミヤマキリシマの絨毯。見事の一言!!。あちこちから歓声が…。移動してはシャッター、触れてはシャッター、景色を背景にシャッター、と賑わっていました。想像をはるかに超えた光景をどのように表現すればいいのか…。?。花の楽園、真に天国、終末期はここで…。と思ったほどでした。目移りし同じ個所を行ったり来たりを繰り返し時間を忘れていました。平治岳標柱では記念写真待ちの列が…。私も途切れたすきにパチリ撮ってもらいました。

予定時間をオーバーし振り返りながらの下山。次の北大船山・大船山を目指しましたが下り返しの急登、約1時間で北大船山(1706m)、そこからまたアップダウン。どうせ登るんだから下らなきゃいいのにとブツブツ言いながら30分で大船山(1786m)。周辺にミヤマキリシマが自生し期待通りのコースでした。ここから今日の宿の法華院温泉山荘までは下りですが、酷使したツケで足の動きが鈍く思うようにスピードが出ず道程が遠かったこと。見えてはいるけどなかなか近くなれない重い足取りでした。

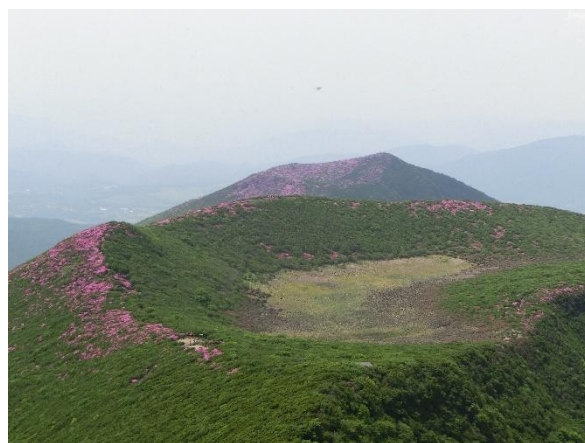
着くと早速温泉へ。頭からお湯をかぶりザッブーンと…。環境保護の観点から石鹸は使えませんが汗を流しお湯に浸ればそれで満足。鼻歌もでる湯加減でした。湯か



大戸越から見上げた平治岳



平治岳



大船山から望む北大船山(正面)、
平治岳(正面奥)

ら上がるとまず一杯。そのビールの旨いこと。まるでジュースかのようにゴクンゴクンと喉を通して胃の中へ落ちていきました。そうしていると食事の時間。ご飯はお代わり自由。明日のためにたっぷり蓄えました。

なおこの山荘は、鎌倉時代に建てられた修行道場でしたが明治の火災により焼失、その頃登山者が多くなったので山荘として再出発したそうです。お寺としても26代目になるそうです。



北千里ヶ浜

今日も4時起床。朝食を済ませ今日のハイライト久住山へ。出発してすぐに岩場の急登。岩を掴み木を掴んで登ること30分、今までが嘘に思えるほど開けた北千里ヶ浜へ。左に奇岩を積み上げた天狗ヶ城、右に噴煙を上げる硫黄山、正面の岩場の先が久住山。それらに囲まれた北千里ヶ浜。約1kmの砂漠のようなこの場所に足が止まり、殺伐としたこの砂漠に子供の頃遊んだ埋立地を思い出し郷愁にかられていました。地面を踏む音がジャリジャリと…、まるで音

を楽しむかのように歩いていました。久住山登頂後三俣山へ向かう際もここを通るため楽しみを残して久住山を目指しました。

北千里ヶ浜を過ぎ岩場を登ること2時間弱、中岳と久住山の分岐点を過ぎ久住山頂へ。付近にミヤマキリシマは見当たりませんが、九州本土最高峰の中岳、これから登る三俣山、遠くは祖母山、それに九州のヘソ阿蘇山が見える360度の眺望に浸っていました。さすが日本百名山!!。地図を広げ九州の背骨の山々を確認していました。

そうしていると遠くに人影がこちらに向かっていました。それでは次の目的地の三俣山に行くか、と腰を上げ久住山を後にしました。



久住山

朝通った北千里ヶ浜。左に硫黄山、右に天狗ヶ城と朝とは逆の景色を楽しみながら三俣山へ。三俣山は北千里ヶ浜から約1時間の登りですが、山頂は本峰・西峰・北峰・南峰の4峰あり最高峰は本峰の1744mです。それぞれの峰にはアップダウンを繰り返して一周することができますが、旧噴火口脇を通るので急坂・急登の連続で約1時間半かかりました。その中でも南峰から見た眼下の北千里ヶ浜は絶景で、左の天狗ヶ城、右の硫黄山の間を貫き久住山へと伸びる一筋の砂漠。また振り向けば昨日登った厳しいお鉢巡りの由布岳、ミヤマキリシマで感動した平治岳、別府と阿蘇を結ぶ「やまなみハイウェイ」など一つ一つが懐かしく、今回の道程を振り返る思い出の山

となりました。

いよいよ最終章。最後の山となる硫黄山を
通って今回の山旅を仕上げる予定でしたが、
髑髏マークの立札が…。なんと火山ガス噴出のため警戒区域に指定されていました。止む無く硫黄山を諦め脇の岩場を注意しながら下山しました。

長者原に着くと足湯無料の看板が目に入り、これはありがたいと酷使しておくんだ足を中へ…。すると冷たい!!。蒸気はあちこちに噴いているのに何故…?。女将に聞く

と夏になると登山者のために意図的に山水にしているとのこと。足湯ではなく足水でした。心遣いに感謝!!。

帰路に歩行者専用橋の「九重“夢”大吊橋」に立寄りました。径間長は「竜神大吊橋」より15m長い390mで、川からの高さは173mあり床のプラ板上に立つと眼が眩むほどでした。施工業者は川田工業(株)でした。

今夜は別府泊。ホテルで聞いた評判の店へ。メニューを見て迷わず関サバの刺身。その美味しさは期待以上。跳ね返される弾力とその味はマグロに勝るとも劣らない噂通りの美味しさに納得。おかげでビールがすすむこと。いい気分になり今宵は爆睡。

翌日大分10:30発、成田12:00着。無事の帰宅となりました。

幼き頃、父から聞いた「くじゅう連山」のミヤマキリシマ。その絨毯を観たいと訪れた今回、父の話を辿りながらの山々でしたが、そのスケールの大きさと山並の景観に感動した予想以上の山旅でした。

今回はミヤマキリシマが目的の山旅でしたが、春は広大なお花畑、夏はバードウォッチング、秋は紅葉、冬は雪の毛布に覆われた山、と四季を通して楽しむことができる自然愛好家に人気の山々です。まだ未踏破の山があるので新たな感動を求めまた来たいと思っています。

なお「くじゅう連山」とひらがなで表記するのは、この山々が九重町(ここのえまち)と久住町(くじゅうまち)に位置するので、両者に配慮し「くじゅう」とひらがな表記になったそうです。



三俣山から望む久住山(正面奥)、硫黄山(右)